

ロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術を受けられる方へ

ダヴィンチによるロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術の特徴は、手術の際の内視鏡画面が3Dの立体空間で表現され、さらに30倍の視野拡大も可能で良好な視野で手術を行います。

ダヴィンチに装着された鉗子は従来の腹腔鏡鉗子よりも動きの自由度が高く、さらにコンピュータ制御による手振れ補正がされるため、細密で正確な手術が可能となります。

米国では2000年にロボットによる前立腺全摘が開始され、手術が安全性・確実性の面で従来の開腹手術や腹腔鏡下手術より優れていることが証明され、現在では前立腺摘出術の90%以上がダヴィンチによるロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術で行われています。

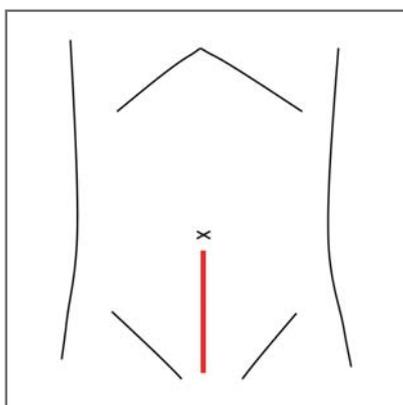
日本では2012年4月に、ダヴィンチによるロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術は健康保険の認可を承認され、それ以降低侵襲手術として急速に普及してきました。当院も2012年にダヴィンチを導入し、これまで250例以上のロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術(2017年8月現在)を行ってきました。



前立腺癌に対する開腹手術とダヴィンチの比較

【開腹手術】

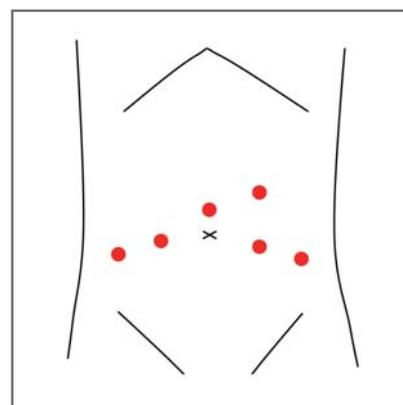
下腹部に内視鏡および手術器具挿入する



お臍から恥骨まで正中皮膚切開

【ダヴィンチ手術】

下腹部に内視鏡および手術器具挿入する



穴が6ヶ所

ダヴィンチによるロボット支援腹腔鏡下根治的前立腺摘除術の利点

- ◎ 腹部の傷が小さいため、痛みも少ない ⇒ 社会復帰が早い
- ◎ 出血が極めて少ない ⇒ 輸血が必要となる出血はほとんどない
- ◎ 手術後の尿失禁の回復が早い
- ◎ 手術後の性機能障害の回復が開腹手術に比べ優れている
- ◎ 前立腺癌の治療成績(再発率)も開腹手術よりもよい

入院から手術～退院まで

当院での手術の概要(入院、手術、退院まで)について説明します。

入院

月曜日手術の方は手術2日前、火曜日の方は手術前日に入院し、手術に備えます。
手術前日夕食後(18:00)以降は食事禁止、21:00以降は飲水禁止です。
眠前に下剤を内服し、手術当日の朝に浣腸を行います。

手術

1. 麻酔

全身麻酔で行います。手術前日または当日の朝に麻酔科医師が全身麻酔の説明と診察を行います。

2. 手術の姿勢

前立腺は骨盤の奥深くに位置しておりますので、腸管が手術視野のさまたげになるのを防ぐために、約30度頭側を低くして行います。その際、眼の圧力が高まる可能性があるため緑内障の方は注意が必要です。前もって眼科医の診察を受けて頂いております。

3. 手術

手術は前立腺と付随する精嚢を一緒に摘出し、前立腺を摘出した後に膀胱と尿道をつなげます。

1. 腹部にポートを設置(径5-12mm、6ヶ所)
2. 設置したポートに手術ロボット・ダビンチを装着し、ロボット専用の特殊なカメラと鉗子をお腹の中に挿入して手術を開始します。手術をする医師はベッドから少し離れたところで、これらの内視鏡や鉗子を操作し手術を操作します。前立腺を剥離し、膀胱との間を離断、尿道を切断して前立腺を精嚢と一緒に取り出します。
3. 次に、膀胱尿道吻合、吻合した箇所から尿が漏れないことを確認します。
4. 前立腺周囲のリンパ節も摘出します。
5. たまったもの(浸出液)の排除のためにドレーンという管を留置します。
6. 内視鏡を入れたお臍の上の傷から前立腺を取り出して、手術を終了します。

なお機器(ロボット)の不具合がまれに起こることがあります。その場合は従来の腹腔鏡下手術や開放手術に移行して手術を続けることがあります。

一般的な術後経過(退院まで)

術後～翌日

- ・点滴の管、尿の管(尿道カテーテル)、おなかの管(ドレーン)が体に入っています。
- ・翌日にはベッドに座るところからはじめ、歩行もできます。
- ・腸の動きがよければ、翌日から水分や食事を摂ることができます。

3日目以降

- ・術後数日は感染がなくても発熱がみられることがあります。
- ・ドレーン、点滴の管は手術後2-3日で抜去します。(状態に応じて長くなることもあります。)

4日以降

- ・手術後4日目に尿道カテーテルを抜去します。
- ・皮下を吸収糸で縫合しますので、抜糸は不要です。

6日目以降

- ・手術後6日目以降、排尿状態に問題がなければ退院できます。

※上記はあくまで順調な経過の場合です。経過には個人差があります。また腸管などに損傷が起こった場合などは食事の開始は遅れます。また、術後の失禁や排尿状態の回復にも個人差がありますのでご了承ください。

ロボット手術はとても良い手術であることをわれわれ術者は実感していますが、決して小さい手術ではなく、副作用や合併症について十分理解して頂くことが大切です。詳しくは、担当医またはホームページでご確認ください。

携帯で撮影してホームページにアクセスできます。

